

## 日本がSDGs達成のために必要なこと

高 二

昨今、世界ではSDGsの取り組みが活発に行われている。日本の達成率は令和三年現在、一六五カ国中十八位だ。全体で見ると順位は高いが、まだまだ課題が残る。とりわけ達成率の低い目標は「ジェンダー平等を実現しよう」だ。二〇二〇年の日本のジェンダー・ギャップ指数は一五三カ国中一一一位である。日本では、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長による女性蔑視発言や、世界各国に比べて国会議員の女性の割合が低いこと、管理職の男女比が均等ではないことなど、他の先進国と比べてジェンダーギャップ解消に向けた取り組みが遅れていると感じる。また、女性のキャリア構築についても、諸外国との差を感じており、それを解決するため、私は日本女性における権利をさらに見直していくことが必要だと考える。

私は今、女子校に通っている。当たり前だが、学校内では生徒会長も委員長も部長も、組織の

リーダーは全員女性だ。「女性がたくさんいる会議は長引く」という発言をニュースで聞いたことがあるが、私が知る限りそんなことはない。女性も会議で建設的な意見を出して、集団をまとめ上げることもできる。次世代のリーダーとなるように、学校ではエンパワーメントプログラムや外部講師による講演などが行われている。女性もリーダーとなるには申し分ない資質をもっているはずなのに、なぜ、いまだ男性が重要な役職の多くを占めているのだろうか。私が暮らす市では、市議会議員の男女比の割合も、男性二十四人、女性六人と、均等とはいえない。しかし、自分が暮らす市の議員に女性が少ないことに対し、「まあこんなものか」と思ってしまう私も、いまだに男女の偏った平等意識が抜けていない。これも日本のジェンダー意識の表れだと思う。

もし、いわゆる男性社会から抜け出さなくてはいけないとなったら、女性を差別化して特別扱いしなければならぬのだろうか。以前読んだ新聞に、「女性管理職を増やすためには、男性の昇進を減らさなくてはならない」という記事があった。その記事の主張は、管理職の男女比を均等にする

ためには、今までの男性の昇進基準は下げ、女性の方が昇進しやすい制度を作らなくてはいけないとのことだった。これでは、また「差別」が生まれてしまう。

「差別はダメ。でも個性は大切に。」

小中学校で行われた教育に、矛盾を感じることもあった。他人は違うのは当たり前であり、そもそも男性と女性は体のつくりからして違う。私は男女の役割分業していたのは、「違い」のなかで効率を求めたからだと考える。男性が外に働きに出て、女性は家事や育児をする。明確に役割が決まっていたから、衝突もなく、家庭内の役割分担は円滑に進んだのだろう。しかし、現代はそう簡単にはいかない。女性でも社会に出て仕事をしたい人は大勢いて、男性でも家事や育児に専念したい人がいる。いわばこれは「個性」だと思う。矛盾しているようにも感じるが、「性差をなくそう」という動きは「個性を守ろう」という動きと表裏一体でもあるわけだ。

日本がジェンダー問題の解決に踏み出すとしたら、ジェンダー平等の推進政策を諸外国から学んでみたらどうだろうか。フィンランドなど、北欧

では女性首相は一般的であるし、アジアやオセアニアでも、女性首相の割合は増加している。どの国でも「やはり男性じゃないとダメだ」などという国民の声はあまり聞かない。女性首長のリーダーシップが、男女平等社会の推進や国民の人権感覚育成につながるはずだ。

人権問題を考えるとき、「平等」と「個性」という課題を避けては通れない。どんな社会問題もそうだが、一筋縄ではいかないのだ。正しい解決方法があるわけでもないし、小さな問題が重なって、絡まり合っているのだから、一つの結び目を解くためには、他の課題解決との同時進行が欠かせない。SDGsを達成すべき二〇三〇年まで、あと八年だ。前述通り、日本はジェンダー平等にはまだまだ課題が残り、女性の立場は確立されていないとは言えない。もっと女性も重要な役割に就き、内側からよりよい国にしていかなければいけないだろう。将来、胸を張って「私たちの国はジェンダー平等だ」と言えるような日本であってほしい。ただ、すぐに解決するのは難しい。今、高校二年生である私は、選挙権もない一人の若者にすぎないけれど、自分の意見を発信していくことはでき

る。私のような考えもあることを知ってもらい、  
多くの方がジェンダーに興味をもってくれたら嬉  
しい。